

暮らしと文化の創造的伝承に向けて

東日本大震災復興10年を考えるシンポジウム (2021.03.20 開催)
事後レポート



2021年9月
早稲田大学先端社会科学研究所

はじめに

本レポートは、2021年3月20日に開催された東日本大震災復興10年を考えるシンポジウム「暮らしと文化の創造的伝承—5地区の実践レポート—」（主催：早稲田大学先端社会科学研究所）を受けて作成されました。

シンポジウムの成果を今後の復興まちづくりへつなげるために、事例報告とディスカッションを記録したグラフィックレコーディングの内容に加えて、登壇者やグラフィックレコーダーの言葉、スタッフによる論考を収録しています。

止まらない人口減少、頻発する災害、そしてコロナ禍。

東北、そして全国の地域社会が、見通しのつかない時代の只中にあります。

東日本大震災後に東北各地で展開した草の根の活動が育んできた思想や方法が、今後の復興・まちづくりを考え実践する一助となれば幸いです。

主催者

表紙写真：本シンポジウムに登壇した5人のゲストそれぞれの活動風景です。シンポジウム特設Webサイトのキーヴィジュアルにも使わせていただきました。（提供：各ゲスト登壇者）

—目次—

シンポジウムの概要	4
-----------	---

登壇者・特別ゲストのことば	6
---------------	---

加藤 拓馬	6
三國 陸真・植木 菜月・佐々木 侑海・鴛崎 宏河	7
李 洸昊・山田 あさか・吉田 春音	8
市川 裕理栄・佐々木 賢司	9

グラフィックレコーダーの視点から / 沼野 友紀	10
--------------------------	----

スタッフによる論考	13
-----------	----

卯月 盛夫	13
落合 基継	18
黒川 哲志	19
佐藤 洋一	20
早田 宰	22
許 海妍	24
清水 健太	26

開催趣旨

2021年3月は、東日本大震災から10年を迎え、様々な立場から復興の検証や評価および記念事業が行われている。見た目のハードな復興事業はほぼ完了したと言われているが、市民の日常生活やコミュニティの再生等ソフトな復興は遅れている。また、被災地において不登校のこどもが増加しているという実態もあり、目には見えない心の復興も指摘されている。

そのような状況の中で、地域が潜在的に有している歴史や文化の価値をこの機会に再発見し、その魅力を次世代のこどもたちに伝え、新たに発展させようとする「暮らしと文化の創造的伝承」の地道な活動が、ゆっくりではあるが被災地に広がりつつある。それは、東北地域が元来有している「地元学」の伝統かもしれない。この地に足のついた「したたかな」そして「しなやかな」パワーは東北人の気質であり、次の復興10年を切り開く鍵になるのではないだろうか。

そこで本シンポジウムでは、岩手県、宮城県、福島県の被災地の現場で「暮らしと文化の創造的伝承」を草の根で進める若者たちの5地区の活動を共有し、復興まちづくりの計画論を議論したい。

(早稲田大学社会科学総合学術院 教授 卯月盛夫)

開催概要

東日本大震災復興10年を考えるシンポジウム「暮らしと文化の創造的伝承：5地区の実践レポート」

2021年3月20日(土)15:30～18:00

開催方法：オンライン (Zoom ビデオウェビナー)

主催：早稲田大学社会科学総合学術院・早稲田大学先端社会科学研究所

参加者数：76名(登壇者・スタッフを除く申込者数)



図：シンポジウム当日の様子。

ゲスト登壇者・特別ゲスト(登壇順)

加藤 拓馬 (一般社団法人まるオフィス 代表理事)

特別ゲスト: 藤田 亜美・小松 美穂 (宮城県気仙沼高校)

戸塚 絵梨子 (株式会社パソナ東北創生 代表取締役社長)

三國 陸真 (早稲田大学社会科学部 4年)

特別ゲスト: 植木 菜月 (聖ウルスラ学院英智高校)

佐々木 侑海・鴫崎 宏河 (宮城県仙台三桜高校)

李 洸昊 (早稲田大学大学院環境・エネルギー研究科 助教)

特別ゲスト: 山田 あさか・吉田 春音 (福島県立ふたば未来学園高校)

市川 裕理栄 (早稲田大学大学院政治学研究科公共経営専攻 修士1年)

特別ゲスト: 高浜 大介 (一般社団法人 燈 代表理事)

佐々木 賢司 (田野畑村役場)

グラフィック・レコーディング

沼野 友紀 (沼野組)

プログラム

15:30 開会挨拶 赤尾健一

趣旨説明 卯月盛夫

15:35 第一部: ゲスト登壇者による事例報告

加藤 拓馬・藤田 亜美・小松 美穂

戸塚 絵梨子

三國 陸真・植木 菜月・佐々木 侑海・鴫崎 宏河

李 洸昊・山田 あさか・吉田 春音

市川 裕理栄・高浜 大介・佐々木 賢司

17:20 第二部: ディスカッション

17:55 閉会挨拶 早田幸

(司会 許海妍・清水健太)

スタッフ

赤尾 健一 (早稲田大学先端社会科学研究所 副所長)

早田 幸 ()

卯月 盛夫 (早稲田大学社会科学総合学術院 教授)

許 海妍 (早稲田大学社会科学総合学術院 助手)

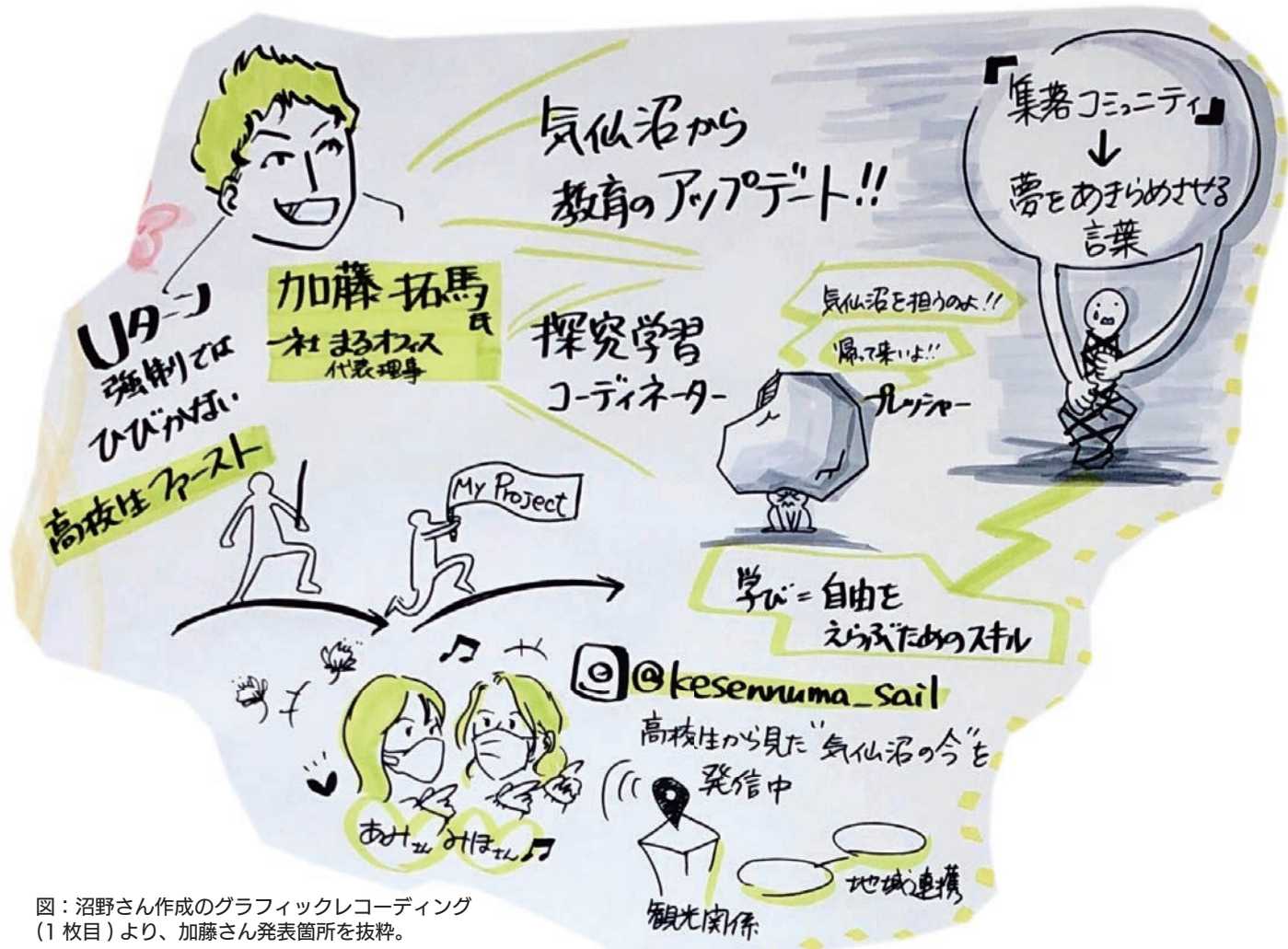
落合 基継 (早稲田大学社会科学総合学術院 准教授)

清水 健太 ()

黒川 哲志 (早稲田大学社会科学総合学術院 教授)

高梨 沙帆 (早稲田大学大学院社会科学研究科 修士2年)

佐藤 洋一 ()



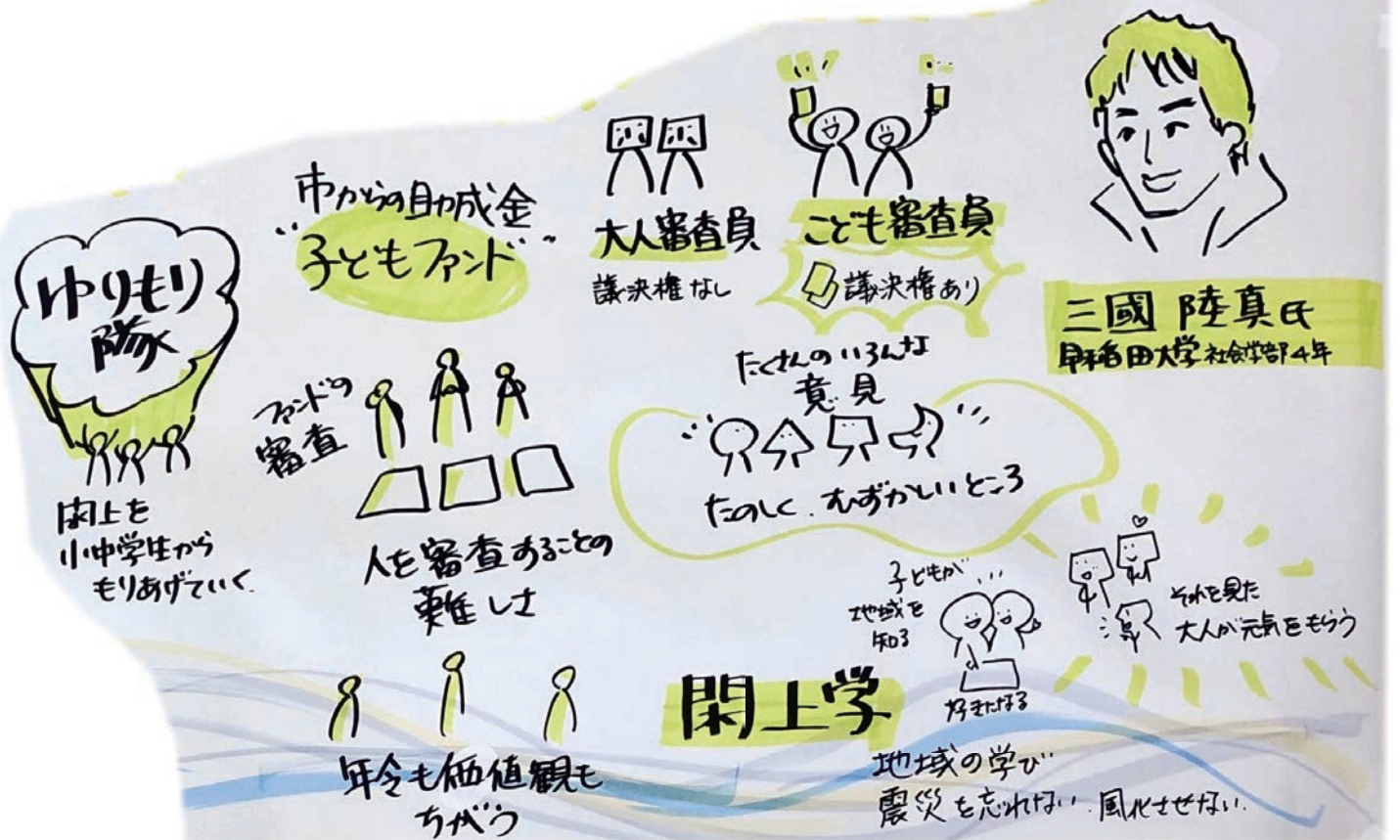
図：沼野さん作成のグラフィックレコーディング (1枚目)より、加藤さん発表箇所を抜粋。

加藤 拓馬（一般社団法人まるオフィス 代表理事）

この度は貴重な機会をありがとうございました。私が伝えたかったことは、創造的な学びが「自由に人生の選択肢を広げていく人」を育み、結果的に地域の復興や伝承に寄与するのであって、復興や伝承のための人材養成を第一義にしてはいけない、という一点です。地元の復興のために高校生が将来Uターンすることを期待するのは地域の大人のエゴだからです。出ていく船があれば、帰ってくる船もある。船を港に留め置こうとしてはいけません。船を行き来させるまちが栄えるのです。次世代の若者たちに様々な「地元との関わり方」を提案できるまちにしていきたいと思っています。

これから日本は激動の時代に入ります。コロナ禍に始まり、テクノロジーの進化、次なる大震災は、私たちの暮らしを一変させ続けるでしょう。この時代をたくましく生きる術は何なのか？大人も中高生と一緒に探究する時期が来ています。そのような想いで、今回気仙沼の高

校生2人にも一緒に登壇してもらいました。彼女たちにとっても、多くの方に自分たちのプロジェクトを聴いてもらえる貴重な機会となりました。遠隔コミュニケーションが当たり前になることは、地方の若者にとって大きなチャンスです。わくわくしながらこの大海原を歩いていってほしいです。ありがとうございました。



図：沼野さん作成のグラフィックレコーディング（1枚目）より、三國さん発表箇所を抜粋。

三國 陸真（早稲田大学社会科学部4年）
植木 菜月（聖ウルスラ学院英智高校）
佐々木 侑海・鵜崎 宏河（仙台三桜高校）

東日本大震災により、沿岸部のまちである閑上は大規模な津波の被害を受け、街並みが跡形もなくなると同時に、数多くの被害者を出すこととなりました。

しかし、いまの「閑上」はきれいな景色や空気に囲まれ、とても住みやすいまちになっています。これを実現させたのは多くの人々の努力や苦労があったからこそだと言えます。施設の建設のみならず、閑上に住む人々も復興を乗り越えようと周りの人々と協力しながら努力を重ねてきました。

今後も東日本大震災の記憶やそれを乗り越えようと努力してきた人々の活動を後世に伝えていくために、今回のようなシンポジウムで発信していくことが重要であると感じました。

（三國陸真）

早稲田大学の方々をはじめ多くの方が名取市に目を向けてくださっていることを知り、とても嬉

しく思いました。そして、名取市民である自分が地元の活性化のために何ができるのかを考えるきっかけにもなりました。これからも地域のイベントには積極的に参加し、名取市をもっとより良いまちにできたらいいなと思います。

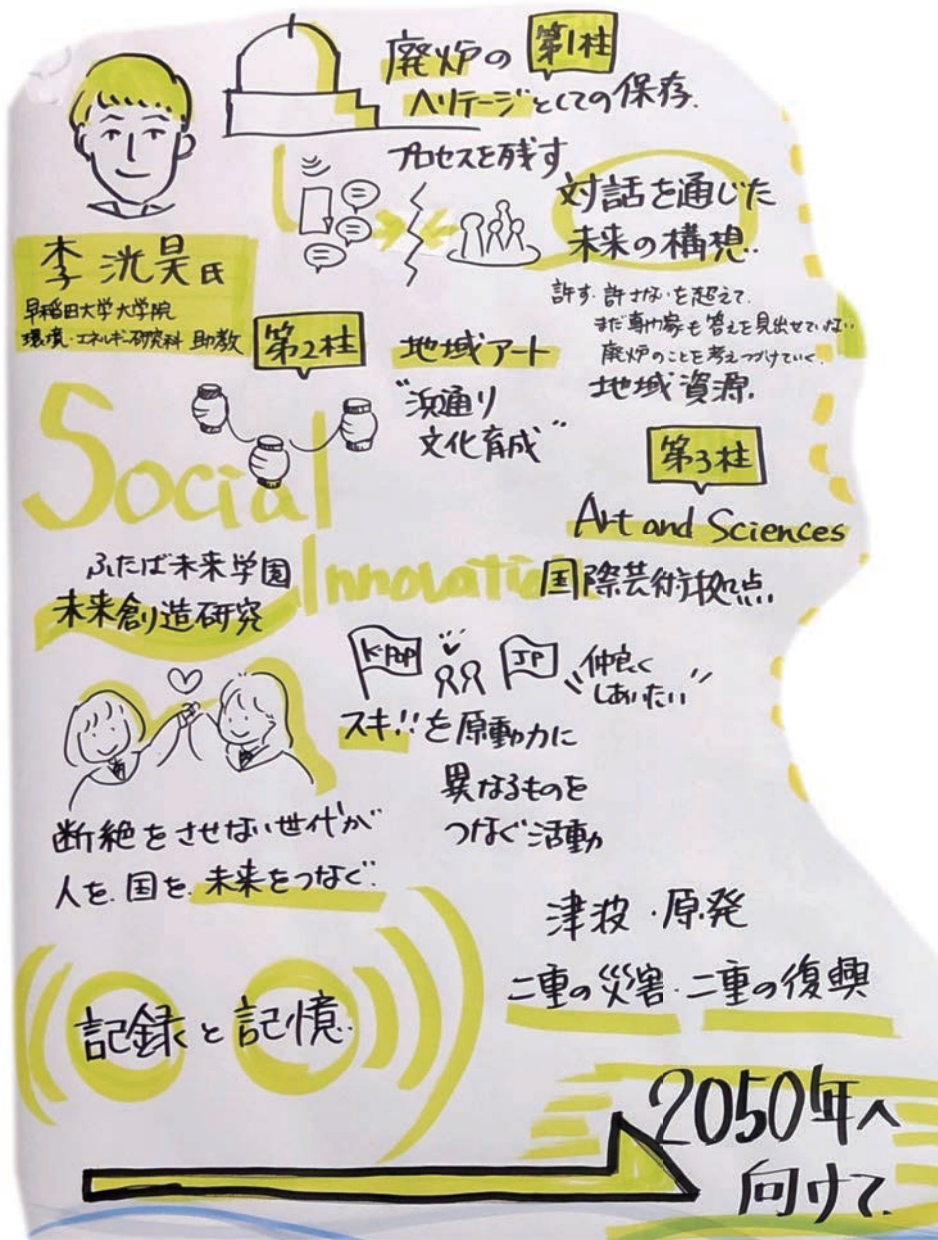
（植木菜月）

自分の住んでいる名取市のことが多くの人に知ってもらえてとても嬉しかったです。震災当時から見ると復興は進んでいますが、まだ仮設住宅に住んでいる方や、見つからない方も多くいるので、絶対に忘れてはいけないことだと改めて感じました。

（佐々木侑美）

他県の方と名取の事や震災のことについて話す機会というのがあまり無かったので貴重な経験になりました。シンポジウムに参加してみて震災を経験した自分たちが他の人に震災の経験や、地元の魅力を発信することはとても大切なことであり、地域に貢献できることだと感じました。

（鵜崎宏河）



図：沼野さん作成のグラフィックレコーディング(2枚目)より、李さん発表箇所を抜粋。

李 洸昊 (早稲田大学大学院環境・エネルギー研究科 助教)
 山田 あさか・吉田 春音 (福島県立ふたば未来学園高校)

今までの復興は、20世紀型の復興とも言われ、インフラ復旧とハコモノ中心の公共事業が中心でありました。実際、福島においてもこのような事業が中心で復興が進められてきました。しかし、今回のシンポジウムで、実際の様々な地域においては、地域住民と共に考え、一緒に取り組むことが実践されていることがよく分かりました。今後は、このような取り組みがそれぞれの地域にとどまらず、様々な地域で共有しながら、お互いに協力して拡散していけるような、広域的な協力ネットワークが形成できればと感じました。

(李洸昊)

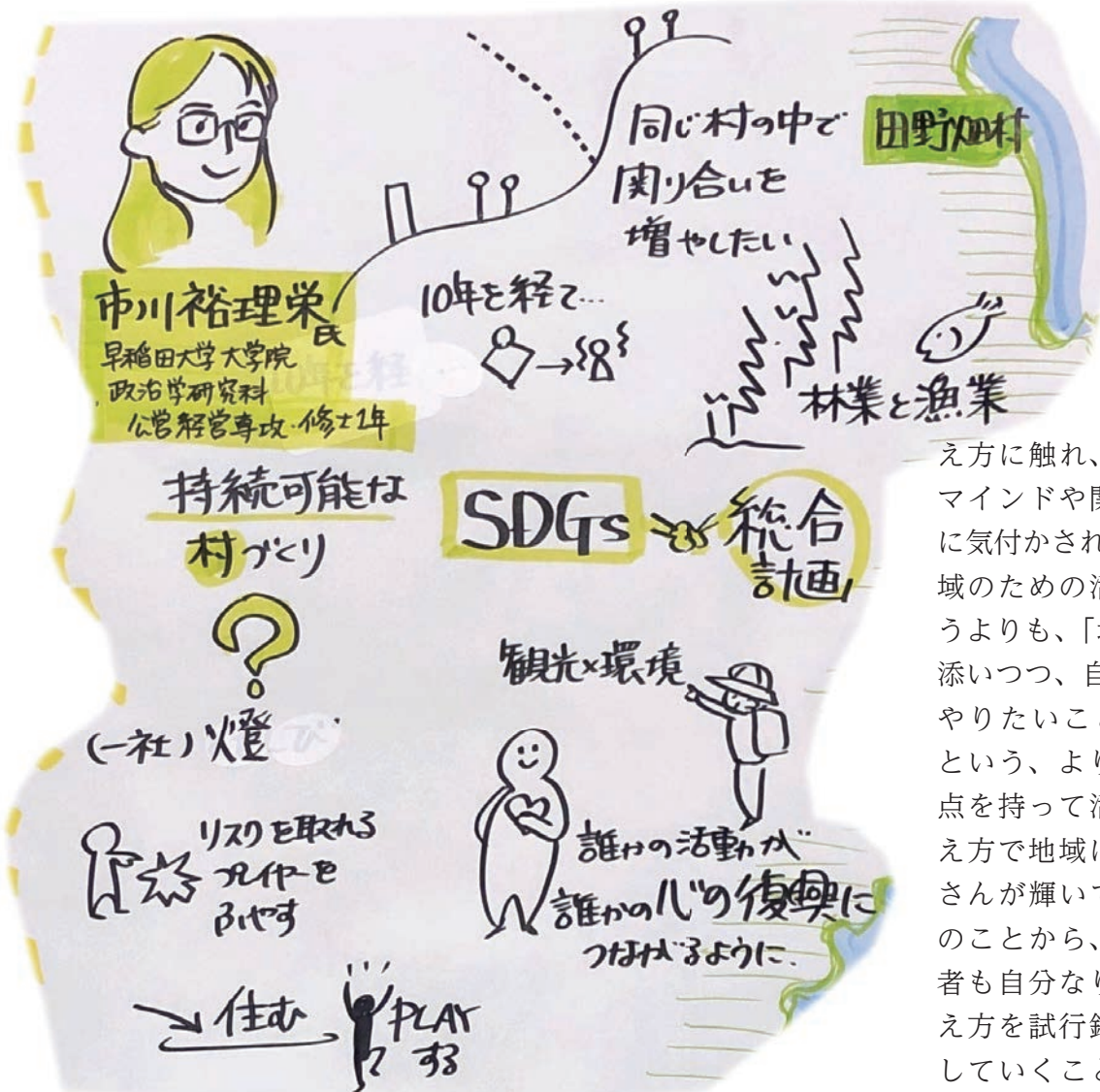
私たちの探究は、規模が大きく成功できるかわかりませんが、少しでも探究を聞いて興味を持ってくれる人が増えればいいなと思います。震災から10年が経ちましたが、韓国ではまだ放射線量が高くて住めないとされているようです。もちろん、まだ住めないところもありますが、安全なところもあり、実際私も住んでいます。このような観点から考えると、最新で正しい情報を発信していくことが重要だと気づきました。皆さんのお話を聞いて、私ももっと行動をしていかなければと思いました。思いつかなかった方法で取り組まれていることが参考になりました。今回は参加させて頂きまして、ありがとうございました。

(山田あさか)

この度はシンポジウムに参加させていただき、本当にありがとうございました。このシンポジウムで私たち

の発表を聞いていただいて、私たちの思いがちゃんと伝わるか、このイベントにふさわしい内容を発表できたかなど、心配がたくさんありました。ですが、他の参加者の方に感想を頂いたり、イラストで表していただいたりして、私たちの思いが少しは届けることができたのかなと思いました。また、他の方々の発表を聞いて共感できるようなことも多く、改めて考えさせられるようになりました。このありがたい機会を無駄にせず、これからも参考にさせていただきながら頑張りたいです！本当にありがとうございました。

(吉田春音)



図：沼野さん作成のグラフィックレコーディング(2枚目)より、市川さん発表箇所を抜粋。

市川 裕理栄 (早稲田大学大学院政治学研究科公共経営専攻 修士1年)
佐々木 賢司 (田野畑村役場)

え方に触れ、地域の活動者のマインドや関わり方の多様性に気付かされました。単に「地域のための活動を行う」というよりも、「地域のことに寄り添いつつ、自分自身が楽しみ、やりたいことを地域で行う」という、より「自己」への視点を持って活動するという考え方で地域に関わっている皆さんが輝いて見えました。このことから、地域活動を行う者も自分なりの関わり方や考え方を試行錯誤しながら実行していくこと、また、地域が活動者の多様性を受容することが、これからの地域活動の持続性にとって重要なのではないかと思います。

今回のシンポジウムに参加し、地域活動への捉え方や地域への関わり方が多様であることに気付かされました。

私が田野畑村に入り込み、活動する中で、よく考えていたことは、どれほど私の活動が、村に貢献できているのかという疑問でした。私が燈のインターン生として行った活動は、行政の総合計画を変革するための提案書の作成でした。村の将来を左右するかもしれない提案なので、意欲的に行ってはいったものの、実際の行動や変革には結びついている実感はありませんでした。このように考えていた私は、村に対して貢献出来ているか分からない活動をシンポジウムで発表して良いのかと悩みながらも参加していました。

しかし、他の登壇者の方々の地域活動への考

私自身も、地域へどのように関わっていくかを悩みながら、考えていこうと思います。

(市川裕理栄)

この度はシンポジウムに参加させて頂きありがとうございました。

今回、他の地域のみなさんの力強い事例報告に触れ、こちら元気を分けていただいたような気持ちにさせていただきました。

新型コロナウイルスの影響で様々な活動が制限されていますが、逆にオンラインで居住地にかかわらず多くの方と交流が可能な時代になりました。今後もこのような機会がありましたらぜひ参加させて頂きたいと思っておりますのでよろしくお願いたします。

(佐々木賢司)

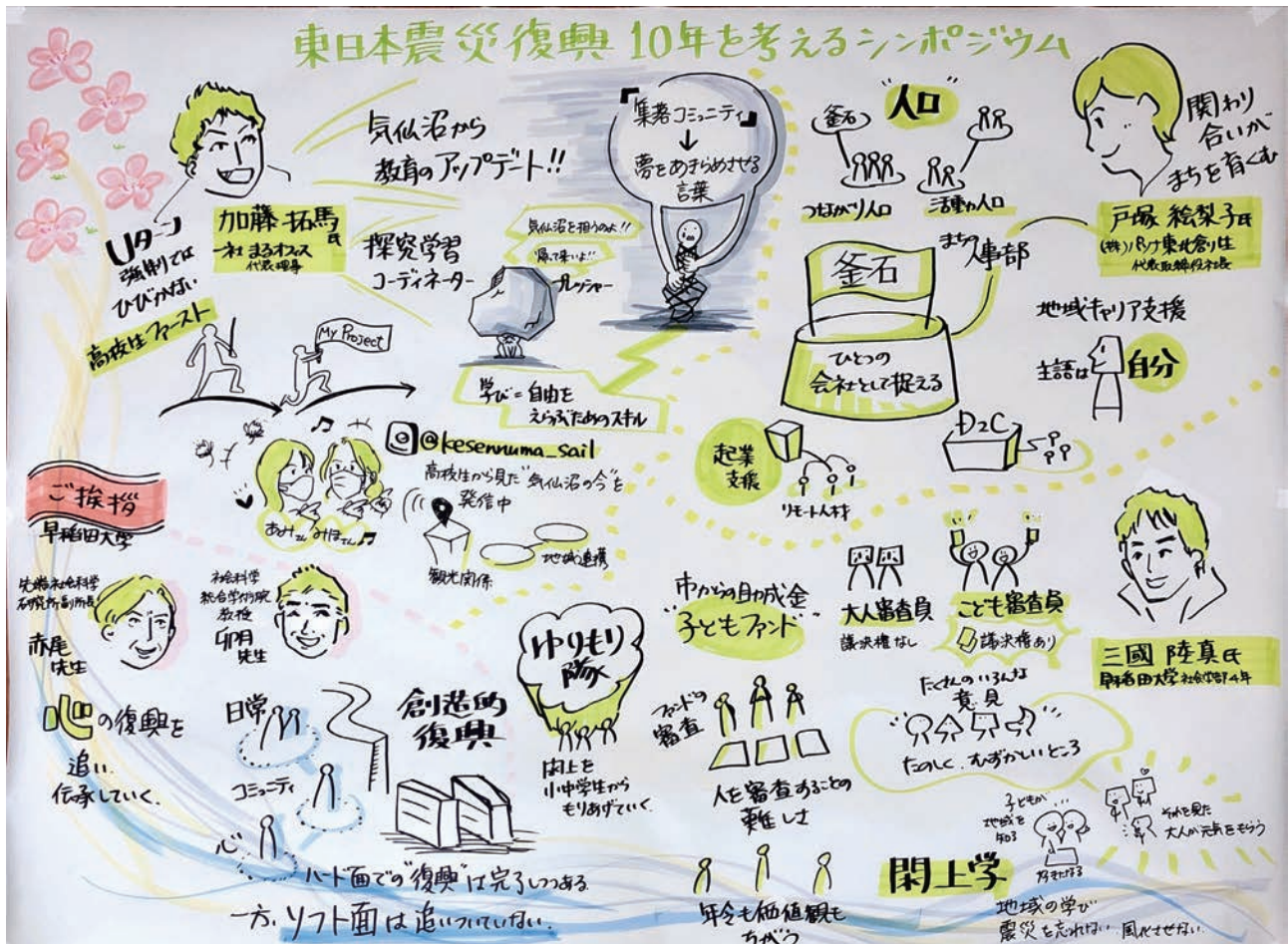
沼野 友紀 (株式会社沼野組 代表取締役)

シンポジウムではグラフィックレコーダーとして参加させていただきました。この10年を様々な思いを抱えて過ごされた皆さまからの言葉を、熱量ものもそのままに残し、これからの対話の足がかりとなることを目指しています。

グラフィックレコーディングとは？

話された内容をリアルタイムに絵や文字を交えてサマライズしながら描いていくファシリテーション手法のひとつで、話を聞くインプットと、描くアウトプットが同時進行する「同時通訳」のような側面が特徴です。話をつぶさに

記録していくという点では映像での録画に叶う情報量はありません。それでもなぜ、人が手描きでグラフィックレコーディング（ないしファシリテーショングラフィック）を行うのか？それは、手描きのグラフィックには「話し手と描き手」双方の熱量を載せて残すことができるからです。情報の取捨選択を通じ、線の一本、色使い、トピックの大小など、さまざまな部分で情報の濃淡をつけ、より効果的に対話をサマライズしながら記録します。



図：シンポジウムで作成したグラフィックレコーディングの1枚目。開会挨拶・趣旨説明、第一部の加藤さん・戸塚さん・三國さんおよび各特別ゲストの発表を1枚の模造紙に記録した。

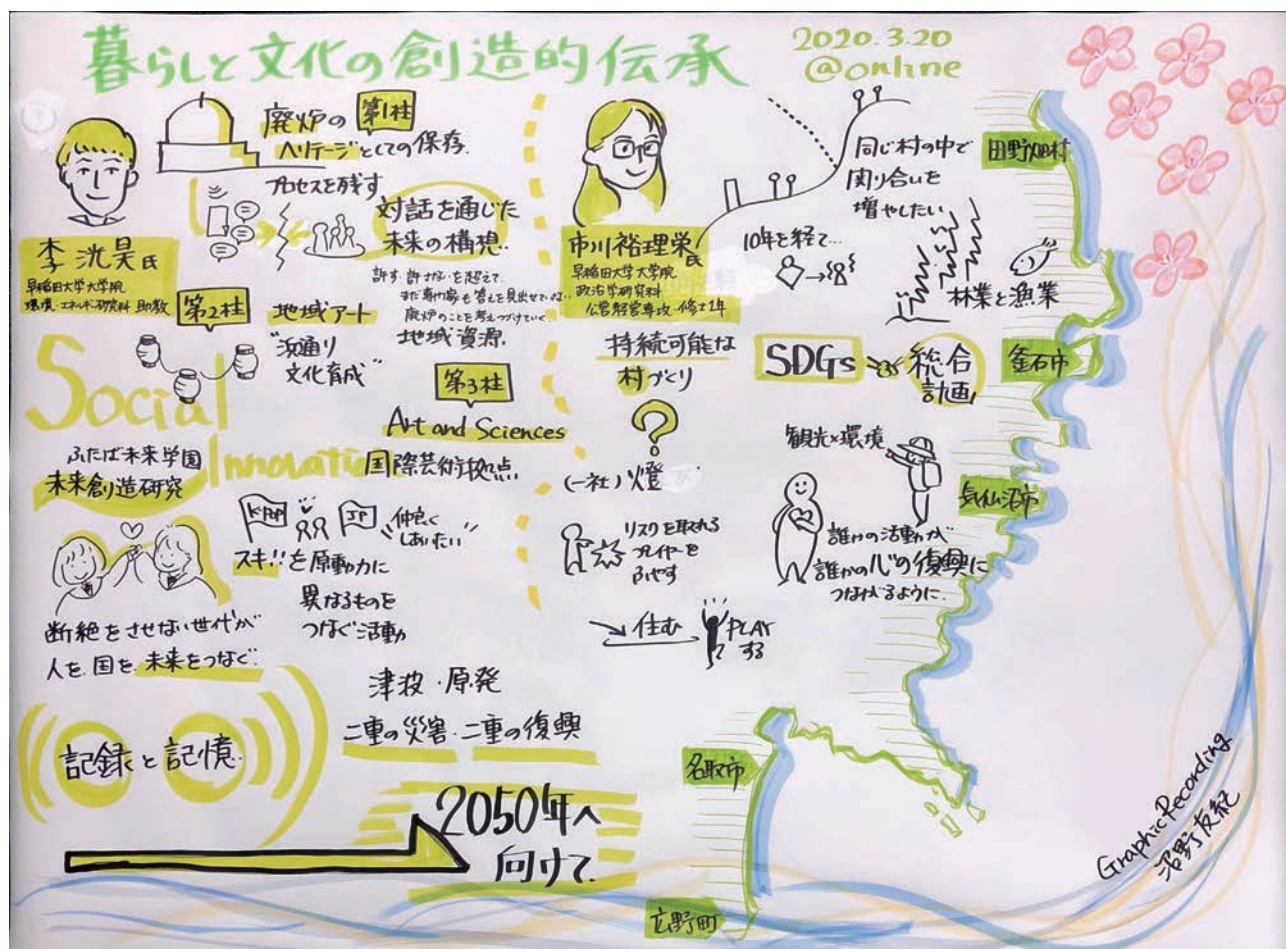
関係性を繋ぐ共創の重要性を示した広野町の試み

今回のシンポジウムでの濃淡の中で、特に描き手として色濃く印象に残ったのは広野町からの実践レポートでした。ご担当の李さんからは3つの柱を示され、そのどれもがクリエイティビティにあふれていました。

たとえば廃炉をヘリテージとして残す話は、復興へのプロセスを残す方法としても歴史的な遺産という側面を与えることが特徴的でした。その中で最も重視されていたのが「対話」の必要性です。対話自体は、穏やかな響きかもしれませんが。しかしこの廃炉の件は見方によれば「被害を与えた・受けた」「(事故を) 許す・許さない

という対立関係が強くあります。対話そのものを始めることすら難しい関係性である点も否めません。それでも解決が見えないことを考えるためにも、対立関係を越えて、未来を考え続ける必要性を示していこうという、これからを生き続ける世代の覚悟を感じました。

この強弱のコントラストが強い関係性を突破するヒントは、ふたば未来学園のお二人からの話にありました。彼女たちは自分たちの好きなことを原動力として、社会的に言われる分断を、分断と捉えてははみませんでした。「好きだから」という純粋で強いエネルギーを持って、軽やかに関係性を繋ごうとしていく姿勢は、私たち大人世代が学ぶところが多くあります。



図：グラフィックレコーディングの2枚目。第一部の李さん・市川さんおよび各特別ゲストの発表の記録。

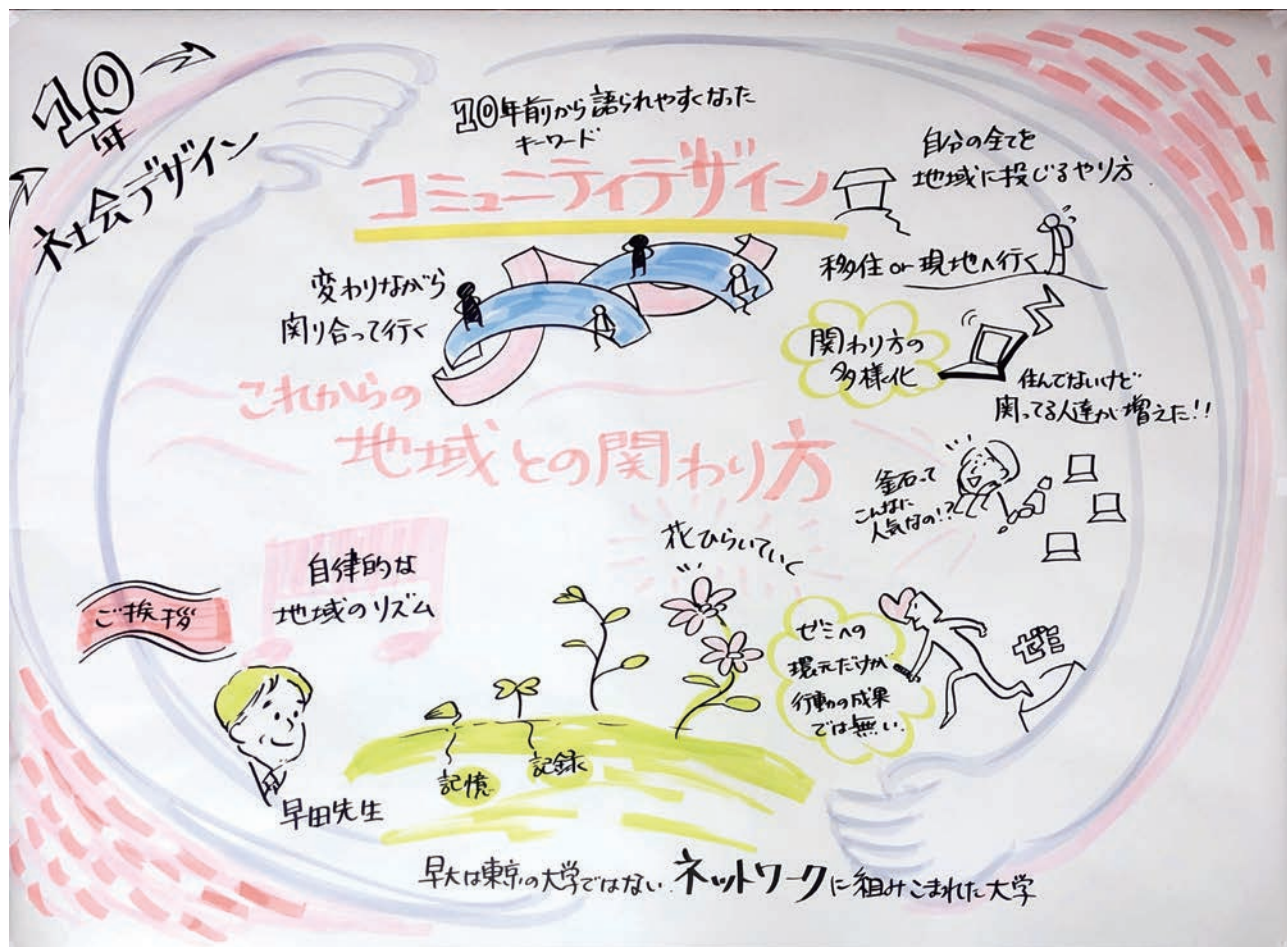
コミュニティデザインのこれから

グラフィックレコーディングを元に、5つの地域からのレポートをふりかえり、最後に早田先生の言葉をきっかけとして、コミュニティデザインの在り方が変化していることについて語られていたことも印象的でした。その土地に住まう事に重きを置かれていた旧来のコミュニティへの関わり方ではなく、住んでいるところは違っても「私は〇〇に関わっている」と思い合えるコミュニティの在り方。これが地域の自律・自走にもつながるようにうかがえます。リモートでのやりとりにも慣れ、これもひとつの当たり前のコミュニケーションになったように、コミュニティデザインも、今の意味にとら

われず、時代に併せしなやかに変化をしていくことが、活気ある地域づくりにもつながるはずです。

*

断絶をさせない世代が人や未来を繋ぎ、記録と記憶、両方を残していくプロセスの一助として、グラフィックレコーディングも活用されれば嬉しく思います。



図：グラフィックレコーディングの3枚目。第二部のディスカッションおよび閉会挨拶の記録。

東日本大震災から10年、復興は終わっていない！

卯月 盛夫

早稲田大学社会科学総合学術院 教授

1. はじめに

2011年3月11日（金）午後2時46分、東日本大震災が発生した。この時、私は学内において、午後3時から始まる学生担当教務主任会という全学の会議に事務長とともに向かっていた。早稲田通りを走る都バスが車体を大きく揺らし、歩道の舗装も部分的に割れ、大学に隣接する宝泉寺の石灯籠が倒れ、なんと階段の上から落ちてきた。エレベーターは休止したが、9階の研究室に宿泊しながら、学部執行部の一員としての様々な対応に追われた。

衝撃的だったのは、連日テレビに流される映像であった。私は、阪神淡路大震災の支援にも行っていたので、高速道路の橋脚やマンションが壊れた現場による地震の恐ろしさはある程度知っていたが、津波の威力に関しては全く知識がなかった。建物や自動車、樹木が流される映像を見ながら、これから東北はどうなるのだろうか、日本はやっていけるのだろうか、と考えていた。この経験は、たぶん生涯忘れることはできないだろう。

2011年4月には、国土交通省が被災地の現況調査と復旧・復興計画策定のために、各自治体に都市計画のコンサルタントと大学教員が派遣されることになった。私は、たまたま宮城県の松島町と利府町担当となり、6月には現地に入った。テレビで見ていた映像が、目の前に迫り、その被災地がきわめて大きな広がりがあることに、さらに驚愕をした。それまで建築、都市計画、都市デザイン、市民参加のまちづくりを日本とドイツで学び、仕事をしてきた自分の経験や知見を、この被災地の復興にこそ生かすべきだという大きな責任と宿命を感じた。そして、2011年6月から当初は1か月に1回は、現地を訪問することになった。

2. 大学でのゼミ活動

一方、私は震災の前年2010年に芸術学校から社会科学部に移籍してゼミを持っていたので、卯月ゼミ1期生の学生とも十分相談をして、被災地支援をゼミ活動として実施することにした。東北の多くの被災地において、まちづくりを模索している同時代に、学生がその現場を共有することの意義は大きいと信じていた。そこで、その後支援の依頼があった宮城県七ヶ浜町を含めて、卯月ゼミに「松島班」と「七ヶ浜班」がスタートした。利府町は、町域もそれほど大きくなく、松島に隣接しているので、ゼミとしての支援は必要ないと考えた。

松島班のゼミ活動は、地元の住民活動との連携がうまく進み、多様な活動を行った。松島第一小学校のこども達と行った公園ワークショップなどをふまえて松島海岸公園の復興デザイン策定、復興イベントの企画とお手伝い、海岸公園に面する商店街の「のれん」デザインや津波で倒された瑞巖寺の松を利用した「ベンチ」づくり、「松島の月」を見る遊覧船やお月見カフェの企画運営といった実に様々な支援活動を行ってきた。松島班の活動としては、2008年3月に終了したが、私は現在でも松島町景観審議会会長として景観と復興に関してお手伝いをしている。

七ヶ浜町は、7つの浜を持つ半島の町であるが、支援の依頼を受けたのは、そのうちのひとつの浜、代ヶ先浜である。津波で流されてしまった公民分館をできるだけ早くに再建したいということで、住民とともに、公民分館の設計ワークショップを行い、町に提案した。残念なことに、検討した時点での敷地がその後変更になったため、最終的な公民分館の建物は、ワークショップによる提案時の形とかなり異なるが、住民も設計者も、ワークショップを通じてみんなで議論してきた成果は新しい建物に反映していると言ってくれた。さらに、地元の住民リーダーは、これまで高齢者がほとんど町の重要なことを決めてきたが、早稲田の学生がきて、若い家族やこどもを含めたワークショップをやっ

てくれたおかげで、町が少しずつ変わってきたと言ってくれた。私も学生も、その言葉に感動した。その後、七ヶ浜町の主要産業である海苔や海産物の東京での販売等のお手伝いしながら、公民分館が完成したことによって、七ヶ浜班は2015年3月に一区切りをした。

2014年には、同じ宮城県名取市の市長から支援を依頼された。名取市も特に閑上地区は大きな被害を受けたため、閑上公民館の住民参加型の設計ワークショップの活動と、名取市全体において復興の次の段階をめざした「なとりこどもファンド」の企画、運営のお手伝いをするようになった。そこで、「閑上班」は2015年4月にスタートした。新閑上公民館の住民ワークショップや小学生と中学生のワークショップ支援活動も、すでに松島や七ヶ浜の経験もあり、比較的時間的な余裕もあったため、丁寧に実施することができた。ただ、復興予算は原則として被災前の原型復旧主義のため、新たな機能の追加や面積の増加は許されず、住民による基本設計はかなり変更を余儀なくされた。もちろん、変更に関しても、丁寧に住民ワークショップを行いながら合意したため、完成時には、住民に大変喜ばれた。また、「なとりこどもファンド」についても、私は当初から「こうちこどもファンド」の企画と運営に参加していたため、ある程度のノウハウはあった。なとりこどもファンドは、2021年にはすでに5年目を迎えるが、こどもたちの自主的なまちづくり活動の芽が次第に育ってきている。特に、高知市と名取市で共通している、「こども審査員制度」は私の予想を覆すほど、こどもたちの町に対する意識を変えてきている。こどもは「大人が想像できないほどの力」を有している、とつくづく思う。当初、名取市前市長が「まちの復興として、ぜひこどもたちの夢を実現させたい！」という思いは、ゆっくりではあるが確実に実現しつつあると感じている。

3. これまでの被災地支援と復興を振り返って

2021年3月に、復興10年を迎えること

から、この重要な節目に社会科学部の教員では、何らかのメッセージを出したいという話になった。その際、私が考えたことは、防潮堤、道路、復興公営住宅等の物的な環境の復興整備は9割程度完了したと言われるが、その整備の進め方にはほとんど住民参加や住民との合意形成を軽んじていたため、コミュニティは破壊され、住民のこころはズタズタにされたのではないかといいことであった。本来は、物的環境の整備とコミュニティの再生は一体的に進められるべきであるということか、私たちは1980年以降学んできたにもかかわらず、被災地での復興ではその経験全く生かされなかったという焦燥感が強かった。もちろん、松島においては、防潮堤の高さに関する地元での熱い議論と海を望む現場で高さを確認するワークショップなどを経て、防潮堤の実施的なかさ上げはなくなった。さらに、上述したように、松島海岸公園の設計や七ヶ浜公民分館や閑上公民館の設計においては、私は可能な限り地元の職員と住民とで精一杯合意をしながら進める復興事業に努力した、そのことに関するある程度の達成感はある。しかし、ここで言いたいのは、個人や地区レベルでの小さな努力ではなく、被災地の復興まちづくりを国として進める時の基本的な考え方、スタンスである。

被災時は民主党政権下で、菅直人首相のもとで「創造的復興」が大きく掲げられた。3県の知事を含む16人の有識者が毎週土曜日に集まり、官僚50人も参加する「復興構想会議」が立ち上げられた。4月の第一回会議で、首相は「元に戻す復興ではなく、改めてつくりだす創造的な復興を示してほしい」と述べた。6月にまとめられた会議の提言では「わが国の経済社会の構造変化を見据え、地方で、この東北の地で、来るべき時代をリードする経済社会の可能性を追求する」と書かれた。被災する前からとも東北地方が持っていた人口減少や産業の衰退という社会的課題を、この復興の機会に大きく超えるようなビジョンを市町村と住民が提案して、それを国が支援していくという大きな

枠組みが示されたため、私はひょっとしたらこの機会に日本の新たな方向性が示されるかもしれない、国が進める都市計画から市民が進めるまちづくりへの転換を40年間地道に進めてきた私たちの目指す大きな流れを作り出せる時期がようやく到来するかもしれないと興奮した。

しかし、翌年2012年に自民党政権が復活し、2013年東京オリパラが決定すると、事態は次第に変わっていった。2014年になると、自民、公明両党が被災地の「自立」を強調し、2015年には全額国費負担の復興は方向転換し、2016年度から事業費の一部を地元が負担することになった。震災からわずか5年で、「創造的復興」とは全く逆の方向に、時計を巻き戻すような国主導の都市計画に戻ってしまった、確かに、東北地方で住民参加のまちづくりを地道に進めてきた地域は少ないし、行政の中にもそのような経験をしてきた職員が少なかったことは事実である。また、一刻も早く復興させたいという国の意向も理解できる。しかし、私はあえて「急がばまわれ!」と言いたい。長い目で見た時に、今のままの中央集権の体質ではなく、地域分権による自律した地域をつくっていかなければ、日本は本当に危うい状況と言わざるをえない。実は、そのための資金もある。人材についても日本全国でみれば、確実にまちづくりのノウハウを有する人材は育ってきたことは事実である。私はこれまでまちづくりの現場で体験したことから言えば、今最も必要なのは「時間」である。関係者ときちんと対話をし、合意形成するにはやはり時間がかかる。「時間がない、決められた時間までに案をださないと予算が削られる!」という呪縛から少しでも解放されないと、日本の市民社会はいつになっても道筋さえ見えない。あえて言えば、行政の「前例踏襲主義」、「原型復旧主義」、あるいは「地方議会は非民主的」「市民はエゴのかたまり」といった極めて古い体質が見えがくれた10年であった。

4. 東北人のしなやかさ、したたかさ

とはいえ、私たちは国に対して文句ばかり言っているわけにはいかない。私たちは、常に毎日の課題に真摯に向き合って、生活を少しずつでも改善していかなければならないし、そのための強さも持っている。それを実感させてくれるのが、「復興から自立へのものづくり、福島のお母さんが作ったクマのぬいぐるみはなぜパリで絶賛されたのか」(飛田江美子著、小学館、2019)の書籍で紹介されている21の事例である。被災地において仕事を失ったり、居場所がなくなったりした女性たちが、おしゃべりをする中で生まれてきた手仕事が、いろいろなネットワークの中で、ビジネスになりつつあるプロセスが丁寧に紹介されている。私が特に興味を持ったのは、「なぜ、震災後に東北の各地で数百ものものづくりプロジェクトがはじまったんだろう」という筆者の疑問に対する、筆者自らが取材の中で得た回答である。

一つ目は、物理的な理由。つまり被災して水産業や農業等の仕事を失った人たちが、狭い避難所や仮設住宅でできるものが、ものづくりだったという点。二つ目は、東北の歴史や文化的背景。厳しい寒さが長く続く東北の冬に、東北人は手先が器用で、細かい作業が苦にならなかったという点。三つ目は、作業療法的な側面。ものづくりをしている間は、津波や余震の恐怖を忘れることができたという点。特に手作りの作品はカラフルなものが多いという指摘も興味深い。四つ目は、「お茶っこ」の親和性。東北ではもともと、お茶菓子を持ち寄りおしゃべりをする習慣があり、ものづくりを通じたおしゃべりによって、お互いに辛いことを乗り越えることができたという点。「人口減少、少子高齢化、産業の衰退、コミュニティの崩壊。課題先進国・日本の中で、東北は一度にそれらの課題と向き合わざるをえなくなった課題先進地だ。東北で生まれたイノベーションは、他の地域のヒントになるだろう」と筆者も書いている。

さらに、東北といえば、「地元学」の伝統がある。柳田國男の遠野物語や宮沢賢治の作品に

通底する世界は、たぶん東北ワールドと呼ぶような日常生活の価値だったのではないだろうか？ しかし、私達は愚かにも失ってはじめて日常の生活の大切さを感じることができる。現在のコロナ禍でも多くの人を感じていることであるが、実はそれは、東日本大震災でも同様であった。失って、そして何を再建しようかと考えた時、すぐに日常生活の価値を認識し、復興に関する要求をきちんとすることができなかつた。したがって、東京発の近代的な都市空間や価値観を鵜呑みにして被災地で受け入れたところ、それまでの自分たちの生活や暮らし、文化とは悉く違ってしまった。つまり、失ったものの本質を理解していなかったために、それとは全く異なるものを目の当たりにしてはじめて、かつての暮らしや文化の記憶を思い出すという悲しさを体験した。

それに気づいた市民は、かつての暮らしや文化をもう一度記憶から紡ぎだし、それをみんなで確認し、改めて共有するというプロセスを体験し始めた。その地道で小さな活動を束ねて、後世の子どもたちに伝えようとする運動論的試みが「地元学」である。一度失ったものを再建、再生するのは並大抵のことではない。しかし、「意識して守らなければ、失ってしまう」ことを経験した市民は、力強くなるかもしれない。

つまり、それ以前に地域の魅力を発見し、それを計画的に残し、発展させる計画文化がなかったこの東北の土地に、大きな地震津波という災害が起きてしまったことは最大の不幸である。しかし、その地域の魅力に気づき、再度作り出そうとする市民の思いや力にはかりしれない。大きな困難を変革の原動力に変えることは可能である。

5. これからの復興まちづくり

被災地のハードな環境整備はほぼ完了したという事実はある。しかし、多くの識者がいうように、生活再建や心の復興は終わっていない。終わっていないどころか、全くはじまっていない、あるいは糸口さえも見えていない地区も多

いのではないか。

被災した42自治体の首長アンケート（朝日新聞社、2021年2月）によると、36人が「将来に不安を感じる、やや感じる」、また特に遅れている取り組みはという質問（複数回答）に「コミュニティ再生（17人）」「こころのケア（17人）」「農林水産業再生（13人）」と回答している。

宮城県知事村井氏は、朝日新聞のインタビュー（2020年12月22日）で、震災10年の残された課題は、「ソフト面での支援です。心のケアが必要な人には個人差があり、個別の対応が求められます。災害公営住宅でのコミュニティづくり、人材の確保や販路開拓、こどもの不登校率の高止まりなど、課題が積み残っています」と述べている。また名取市教育長瀧澤氏も、名取市でのこどもの不登校は大きな課題と指摘していた（ゼミ生と私とのZoomインタビュー、2020年12月24日）。もちろん、被災したことと不登校が直接関連するか因果関係はないかもしれないが、この10年の復興プロセスがもし異なる方法で進められていたら、違った状況になっていたのではないかと考えざるをえない。さらに、復興構想会議メンバーによる「総合検証、東日本大震災からの復興」（五百旗頭真他監修）の中でも、生業や地域社会の再生に関して、被災地の厳しい現状が指摘されている。政府によるこの10年の復興政策の総括が示されない中で、私たちはこれから、この負の遺産というべきツケを、地域の総力を結集して、解決していかなければならない。

最後に、今回のシンポジウム「暮らしと文化の創造的伝承」において、事例紹介とその後の議論から浮かび上がった、今後の復興まちづくりを進めていくためにモデルを示しておきたい。

< 計画の手法 >

① 発見的方法による魅力ある地域資源の共有化
 地域の暮らしや文化を継続的に発展展開させていくためには、その地域ならではの歴史や空間や人物等資源の魅力を顕在化する必要がある。そのためには、その地域に暮らす人が日常的には気づいていないかもしれない知恵や宝物を発見する機会を提供し、共有化することが重要である

② 創造的な方法による新たな価値の提示
 発見した魅力をそのまま伝えていく方法もあるかもしれないが、それが難しい場合は、地域の実情にあった形に変更していくべきである。どのような工夫で伝承し、新たな価値を創造していくかが問われている。

< 計画の目標 >

① つながり人口を増やす
 人口減少社会の中で、地域外の人とどのようにつながることができるかが問われている。そのためには、その地域ならではの魅力およびその創造的伝承の姿や形を提示することによって、交流人口やつながり人口を増やすことが可能となる

② 持続可能な仕組みをつくる

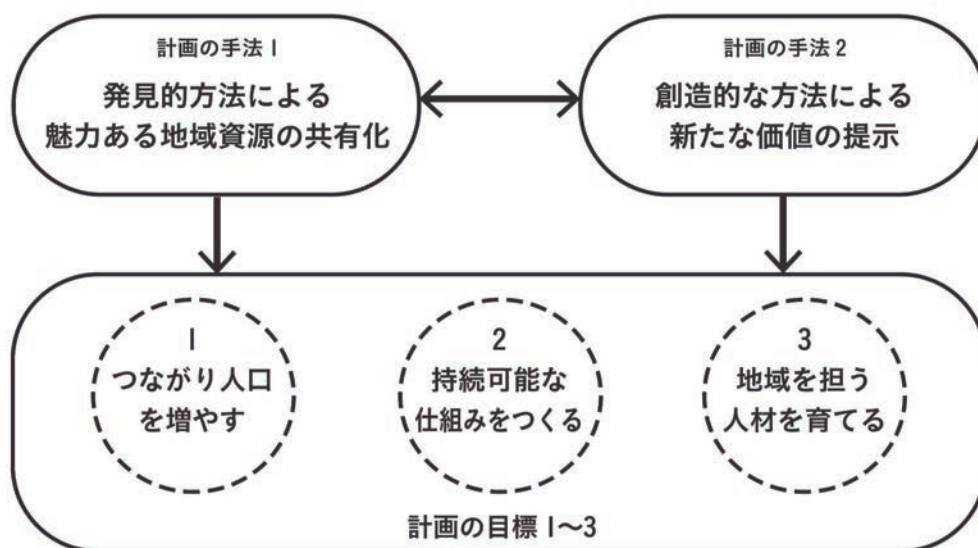
魅力の発見と創造的な伝承方法が実践されたとしても、それが外部要因だけによるものでは継続しない。地域のより内発的發展を促す制度と仕組みの構築が必要になる

③ 地域を担う人材を育てる

持続可能な仕組みのひとつとして、どれだけ地域を愛し続ける若者がいるかが重要である。そのためには、その地域に対する自信や誇りが必要である。地域で暮らす若者の生き方や新たな価値観こそが、次世代につなげていく最大のキーポイントである。

「復興は終わっていない」というのが、この10年の私の印象である。これからの10年は、国や県が進める物的環境整備の段階から、市町村と住民が主体的に進める、生業と文化、コミュニティの再生の段階に移る。下手をすると、地域の格差がこれまで以上に拡大するかもしれない。しかし、それを恐れず、可能な地域で、地域の個性や市民のアイデアや工夫をていねいに紡いでいくべきである。私たちの次の10年が問われている。

「暮らしと文化の創造的伝承」モデル



「よそ者」としてできること

落合 基継

早稲田大学社会科学総合学術院 准教授

わたしは社会科学部で農村デザイン研究ゼミを担当し、ゼミの学生とともに東北地方と東海地方の中山間地に継続的に通い、現地にて地元の人から農村地域の現状を学び、それを元に地域のお役に立てればと学生の発想で解決案を提示するなど活動をしている。農村地域から見れば私たちはよそ者である。よそ者という立場として農村地域でなにができるのか、については常日頃から考えておりまた悩んでいる。今回の登壇者はいずれもよそ者あるいは元よそ者として活躍されている方々である。シンポジウムの本来のテーマに加えて、そんなよそ者が地域に入り込みどのようにふるまい、どのようなご苦労をされ、なにを学び地域で活躍できるようになったのか、という点に個人的な関心を持ちながら話を聞いた。移住して限りなく地元民に近いよそ者、移住はしたがよそ者としての立ち位置を強みとして使う者、一定期間住んで地域のために活動する者、東京と現地の共同で組織をつくりそこで活動する者、東京から通って活動する者、地域との関わり方や活躍内容やご苦労は様々であった。

大学で教員・研究者をしている立場としては、完全に移住してというわけにもいかない。大学は東京にあるし、一つの地域だけではなくいろいろな地域を研究対象とすることも研究者としては必要なことだと考えている。また移住をしたとしても、その地域ではよそ者として認知されるのであろう。その中でどのように活動するか、が重要である。よそ者とか地元とか関係なく地域に必要なことをテーマとして活動していくこともあるし、一方でよそ者としての立場を強みとしてうまく使うこともある。気仙沼の加藤さんのご経験では、移住しないとわからなかったこともあったようである。わたしの立場としては、地域に定期的に通うというよそ者

の立場が適切であろう。その点で閑上で活動されている卯月ゼミの三國さんに近い。閑上ででの活動を5年以上されており、その中での信頼関係を積み重ねてこられたことが重要な点であろう。

また今回のシンポジウムでもう一つ注目したのが、田野畑村の高浜さんの「リスクをとって自分でやっていくプレイヤーが必要」という言葉であった。わたしも以前よりこのことは地域づくりでは一番重要なことではないかと考えており、これまでに全国各地のキーパーソンに最初の一步を踏み出すにはリスクがあり勇気があるがどのように決断したのか、と聞いてきた。その答えは「そんなこと考えたこともない」か「やらなきゃはじまらないだろ」であった。やる人は躊躇せずにやるだろうし、やらない人は躊躇してやらない、という身も蓋もない答えであった。“人による”では、その人がいなければ始まらないということであり、そうではなく、躊躇せずにできるような環境やシステムをどうデザインするか、が私たち研究者のすべきことと考える。地元の人にとってもよそ者にとっても、一步を踏み出せる環境やシステムである。逆説的には、まずは勢いで動き、その時々で課題は乗り越えていく、というシステムが“人による”システムなのか。“完全な”環境やシステムをデザインするよりも今のところは現実的か。この場合、よそ者の方が地域の資源や事情を当たり前のものとして見ておらず、一方で地域外の事情もわかっていれば、なにか新しいことをするには強みを発揮するのかもしれない。

わたしは今後も移住をしないよそ者であり続けるのであろう。よそ者として地域の人に寄り添っていくことはできると思っている。よそ者の研究者としてできるだけ完全な環境やシステムをデザインすることを目指したい。

被災地域の振興と人材ネットワークの形成

黒川 哲志

早稲田大学社会科学総合学院 教授

東日本大震災から10年が経過し、若者たちを担い手とした地域の再生が進んでいる様子が、生き活きと伝えられたシンポジウムであった。大都市集中と少子高齢化が進む日本の中で、被災地は、このトレンドの克服とともに、震災被害からの復興が課題となっており、容易でない状況に置かれている。このような状況の中での若者を中心とする住民らの地道な活動が伝えられたことは、被災地の外にいる者に対して、安堵の感情を与えるものであった。

登壇者およびゲストの言葉の多くが、心に響くものであったが、なかでも気仙沼から教育のアップデートについて報告された加藤拓馬さんの問題提起が、本質的であり、考えさせるものであった。地域で育った若者が、地域に残って地域を盛り上げてもらいたい、あるいは大学などで都会に行っても、卒業後にUターンして地元に戻って地域のために貢献してほしいという大人の願望が、若年者を地域に縛り付け、若者の可能性を摘み取ってしまうことになるという認識である。地域の若者が多様な就労機会のある都会で自らの夢や希望を実現することを応援することなく、そこに住む人が充実した生活を営むことのできる魅力ある地域づくりはできないという構造的な矛盾に向き合うものである。

地域の置かれた環境などの特性を生かした産業を振興し、地域の魅力を磨いて、都会や他の地域から人を呼び込むような発展も、地域の持続可能な発展の一つの方法であろう。戸塚絵梨子さんの言う「活動人口・つながり人口」の拡大による発展も、有効な方法と感じられた。三國陸真さんの紹介してくれた子供たちのように、地域の主体として青年・少年期を過ごした経験は、たとえ都会に生活するようになって、地元への強い紐帯として生涯失われることのないものである。

福島では、地震と津波の被害に加えて、福島第一原発事故による放射能汚染への対応もあり、この被害を受けている地域での復興は、さらに困難が伴っている。汚染に関する誤解や風評被害の問題は、今日まで続いている。その中で、李洸昊さんの紹介した福島第一原発を広島原爆ドームのような遺産として保存し、福島第一原発事故という惨事の記録と記憶として、将来に伝えようとする試みや、これを地域リソースとして位置付けるような動きも伝えられたことは、大変興味深い。

震災からの復興は、単なる復旧ではなく、そこに住む人々の持続可能な生活基盤の再構築であるのであり、市川裕理栄さんの指摘するように、地域の持続可能な発展の実現とそのためにリスクの取れるプレーヤーが増えていくことが必要である。様々なルートをつかって、このようなプレーヤーを育成していくことが、これからの地域の発展につながっていくであろう。

被災地であるという困難な状況を克服した後、地方の都市や町村の衰退という全国で共有する課題に直面するのであるが、本シンポジウムで紹介された地域には人材が育ってきているようであり、これからの展開が期待される。

オンラインだからできたというわけではない

佐藤 洋一

早稲田大学社会科学総合学術院 教授

今回のシンポジウムは東北各地と大学をオンラインで繋いでおこなった。コロナ禍に振り回され続けた2020年度最後に行ったイベントとして、運営側の視点から今回の経過とこれが実現した経緯を簡単に記録しておきたい。

どこに焦点を合わせるのか

このシンポジウムは、東日本大震災10周年を振り返る機会として、社会科学総合学術院の社会デザイン系の教員（卯月、落合、黒川、佐藤、早田）により企画・発案された。特にいくつかの被災地とゼミナールでの活動を中心に長く関わりを続けている卯月が企画の中心となった。社会デザイン系の教員や学生たちは、被災地に限らず、遠隔地で活動を行うのに際し、「どのような関わり方をしていくべきなのか」「どのような関わり方をしうのか」という問いに常に直面する。この前提的な問いと向き合った上でないと、意味のあるシンポジウムにはなり得ないだろう。この認識は我々教員の間で共有していた。

そこで大学そのものや教員とそのグループ自身の活動そのものではなく、大学を母体としながら展開し、広がり続けている「関わりそのもの」をみることにした。直接的な自己言及で場が閉じてしまうことは避け、やや外側の視点から捉え直すことで、10年間の歩みを点検し、広く共有すべきだと思ったからである。

「関わりそのもの」をみるために、「関わっている人」や「関わり場」や「関わりを作るプロジェクト」に焦点をあわせた。大学が関わる活動からスピンオフして地域との深い関わりの中で活動している本学の卒業生や在學生、さらに彼ら／彼女らが関わっている地元の人々、特に高校生の声に耳を傾けることとなった。スピーカーの平均年齢を計算していないけれど、

将来を担う若い世代に焦点を当てられた点にも特徴があるはずだ。

つまりこのシンポジウムは、震災後10年の経緯を受けて各地の若者が展開している「関わりの現在形」に焦点をあわせることで、今後どのような道筋で復興を進めていくのかを考える場になったのである。

どのように場を作ったのか

結果的に今回スピーカーとなった人は20人である。ゲスト登壇者5人、特別ゲストが9人、そしてグラレコの沼野さんと運営側で発言した5人を足した数である。もしこの規模の登壇者を集めるイベントをコロナ前に実現しようとしたら、どうなっていたか。早稲田か、あるいは被災地などのリアルな場所に来てもらうことになっただろう。一つの場所に集まる場合、移動手段や移動時間の確保、交通費なども発生するから、前もって調整を始める必要があった。つまり開催のためのコストだけを切り取って考えれば、こんなにコストパフォーマンスの良い方法はないことは明らかである。

今回の準備の流れは表に示した通りで、日程を決めたのは12月半ば（しかしその後変更になった）、内容的な検討の打ち合わせは1月下旬からであり、大変スピーディに企画が実現できた。このスピード感は、オンラインだからもたらされた一面は確かにあるが、だからといって一朝一夕に実現したわけではないことは強調しておきたい。ほぼ同じメンバーで3年前に運営を行ったシンポジウムでの経験は大きいし、我々教員スタッフと今回事例報告をしていただいた方との日頃からの教育的あるいは実践的関係がなければここまで滞りなく実現することはないだろう。そうした一つ一つの関係の蓄積を無理なく持ち寄り、束ねられる場をオンライン空間に実現できたに過ぎない。

したがって今回のシンポジウムの事例をもって、オンラインであることをコストパフォーマンスの観点から過大評価するのは筋が違う。今回のシンポからは実感した可能性は、一つ一つ

表 シンポジウム実施までの流れ

日にち	出来事
12/16	実施日程を決める（その後変更あり）。教員のほか、許、清水の助手二人を中心に実行組織を固める。
1/9	「内容を詰めましょう」（早田からのメール）と打合せ
1/21	初回打ち合わせ 卯月からの企画案「暮らしと文化の創造的復興」（1/16）について検討。大筋で決定。復興の各地で活動が続いている早大卒業生や早大生に事例を報告していただく形で人選を進め、打診。事例報告者の方にはともに活動する高校生などの地元の方の言葉をビデオレター形式で紹介したいという話になる。卯月が主旨説明の動画を作って共有することにする。
1/29	打ち合わせ。報告者決定。
2/11	事例報告者の方々と打ち合わせ。お願いする内容を詰め、ここから準備を進めていただく。気仙沼の加藤さんとは2/17に打ち合わせ。
3/4	web page を公開。参加者の募集を始める。沼野さんとグラレコの打ち合わせ。WAVOC（平山郁夫記念ボランティアセンター）のシンポ「3.11からの10年を振り返る - 早稲田と被災地のこれまでとこれから -」と時間が重なることがこの日に判明。
3/5	WAVOCと調整し、時間変更決定、同日中に登壇者・グラレコ沼野さんへ変更の打診をし、承諾を得る。各種 Web（特設サイト・先端研）の日時の更新。
3/16	許、清水、佐藤で会場（14号館604教室）にて機材設定の確認。
3/20	本番当日。朝9時セッティング開始。

の小さな蓄積を束ねる場としてのオンラインという手段の可能性である。実際の現場での実践の積み重ねの上に成り立っていたのであり、オンラインだからできたというわけではない。

使った分をどう返せるか

皆が集まって議論するための工夫としては、企画総括の卯月が、今回のシンポジウムの趣旨をお話した動画を提供し、見てもらえるようにした。このことで、各地の多様なバックグラウンドを持つ事例紹介者やゲストと認識を共有できた面もあり、これはオンラインならではの認識の醸成方法であった。

大学が各地域で関わってきた社会連携活動がコロナ禍でストップしてしまった例は数多い。今回と同様の試みが適用できるケースは大学周辺に様々にあるし、実際それが実施されている例も少なくないだろう。今回のシンポもコロナ状況下でオンライン手法による遠隔地との

コミュニケーションを模索した事例の一つであり、概ね成功し、その手応えを感じた。

今回のオンラインによるイベントを評価するためには、この集まりで、どれだけの価値や資源を新たに追加できたか、ということになるだろう。今回の成功にはコロナ以前から蓄積されてきた関係や資源が欠かせなかった。活用した資源をもとに新しい資源をそこに付加し、新たな関わりを作れるかどうか、つまり「使った分だけ返せるか」が問われることになる。これは現状では判断がむずかしい。たとえば今回の事例報告のゲストとなった各地の高校生たちが互いに関係を作れることは、こうしたシンポジウムでのもっとも望ましい成果なのだが、実際に言葉を交わすためには、オンラインの際はそのためのお膳立てをしなくてはならない。「その時」「その場」を共有する会場であればたやすいミクロな関わり合いの発生は、残念ながらオンラインでは望みにくい。

より自由で個々による創発的な関わり合いは、オンライン空間でいかに実現し得るのだろうか。このシンポジウムが基礎としていた関わり合いは、空間的な制約のみならず、時間的な制約も超えて、オンライン上で持続可能なものであった。「その時」「その場」ではないコミュニケーションにより創発的な関係を誘発しうるか。今回のオンラインによる布石を、次の関わりへとどのように繋げられるのか。それは継続的な関わり合いの中でしか育まれない。今回制作したこの冊子もそのための材料やフックの一つになるのだろう。

オンラインコミュニケーションによる関わり合いは、どのように資源を追加し、新たな関わり合いを作りうるのか。今回のシンポジウムのタイトルにもある「創造的伝承」とはこうした今日的な意味も含意しているはずである。つまり使った分をどう返せるか。そこにどのくらい上乘せができるのか。今回の手作りのシンポジウムの中で生まれたこの課題は、継続的な場の運営を理念とする大学が引き受けるべき大きな社会的課題なのである。

文化資本とローカルコンテクストの編集 —主体と環境の相互作用の理論の再構築へ向けて—

早田 宰

早稲田大学社会科学総合学術院 教授

本稿の目的

暮らしと文化の創造的伝承を社会デザインの立場から考えるための学際的な理論の確認とその展開の課題について考察しておきたい。

社会が文化をつくり、文化が社会をつくる

社会デザインの理論の源流をたどるとレヴィン (1936) ^{*1)} に行きつく。彼は、個人と環境は相互作用して人の行動を決定しており、その場の構造を「生活空間」と位置づけた。

個人と環境をつなぐのが文化である。社会が文化をつくり、文化は社会をつくる。文化とは、様々な視点から定義されるが、もっとも知られたテイラー (1920) ^{*2)} の定義によれば、社会の成員としての人間によって獲得された知識、信条、芸術、法、道徳、慣習や、他のいろいろな能力や習性 (habits) を含む複雑な総体とされる。とても幅広い。

文化の本質とは覚悟と信念

文化は単にそれらは複数の要因の組み合わせによる産物ではない。それらの要因が相互作用し自己組織的なシステムとして現われる。例えば、小麦粉という食材でイタリアでは「パスタ」がつくられ、日本では「うどん」がつくられる。同じうどんでも山梨では「ほうとう」になり、名古屋では「きしめん」になる。原材料に大きな差はないが、小麦粉の練り方、太さ、塩加減など微妙なバランスの差異化により決まる。

クラックホーン (1949) ^{*3)} が指摘したように、文化プロセスの本質は選択性である。そこには地域の制約の中で何が理想であるべきか、なぜそうでなくてはならないのか、他ではいけないのかについての考え方や感じ方の覚悟を前提に、改良のための創意工夫や保存のための努力の積み重ね、価値基準と信条の構造が織り込ま

れる。そこには挑戦や失敗の汗がしみ込んでい。それゆえに象徴に表現される意味のパターンには誇りやプライドがある。

文化のエコシステム

文化生態学では、文化はエコシステムの中にあると考える。フィンケ (2013) ^{*4)} は、文化は自己再帰的なダイナミクスであり、知識、信条、芸術、法、道徳、慣習などの文化資本となるサブシステムは相互依存しており、お互いに輸血していると表現した。知識は容易にメディアやネットで別な集団へ移転されるが、法、道徳、慣習などは容易には変容しない。その中間で信条や芸術はゆるやかに変化してゆく。

文化は生態的であり隣接する別の文化と生き残りをかけて競合している。その競合に勝たないまでも負けないでいなければ消滅してしまう。すばらしい文化であったにもかかわらず、文化の生き残り戦略に失敗し、滅びてしまった文化も多い。たとえば、染色は中世が最盛期であったといわれている。現代は色落ちの防止技術が失われてしまい当時になかない。モノの使用期間の短期化とあいまって消費者の価値基準と職人の信条の構造の全体システムが解体して途絶えてしまったためである。

現代における文化のコンテクスト

文化を保存するサブシステムは、それぞれグローバル、ローカルの文脈の中で変化している。グローバル、ローカルは相互作用している。人の知識や行動を革新するのは、新たな学習機会だけではない。知識は最も移転の容易な文化資本であるが、知識から変化がはじまるとは限らない。ダマシオ (1994) ^{*5)} は心と体の関係についてソマティックマーカー仮説を唱えた。脳で考えるのではなく、適切な意思決定には身体と情動の両方が必要であるというものである。地域文化になぞらえれば、文化の大切さは、頭で理解すると同時に体 (五感) で感じることから影響を受けている。知識だけのアプローチではなく、身体や習慣からのアプローチからも変化

をもたらさなければ、文化は簡単には変化しないだろう。

コミュニティプロファイリングの再構築

コミュニティプロファイリングとは都市計画やコミュニティレベルのローカルなプランニングでおこなう地域診断である (Hawtin (2007) *6)。ソーシャルワークやケアマネジメントのアセスメントとも似ている。これまでは、人口、環境、風土、歴史、建物、組織など地域資源などのカウント、見える化 (エコマップの作成)、その抱える強み弱み、機会脅威などを明確化するものであった。

さらに文化資本からのプロファイリング、地域における知識、信条、芸術、法、道徳、慣習などの状況、その文脈、とりわけ文化のイノベーターなどの人的組織的資本の創造的な活動を明らかにし、そこから社会イノベーション、文化の創造的伝承のローカルコンテキストを明らかにする必要があるだろう。

文化の超越と再埋め込み

文化のイノベーターは、文化をよく理解し、その織物を大切にしながらも、伝統に固執せず、新しい糸や編み方をその中によりよい形で組み入れていこうとする。マズロー (1970)*7 は、自己実現を成し遂げた人に共通する 15 の特徴を抽出した。その中に、文化の超越性、つまり文化へ組み込まれること (Enculturation) への抵抗をあげた。簡単に既存の文化体系の中に自分の試行や行動が組み込まれて単に埋没してしまうことには文化と社会のイノベーターは妥協してはならないのである。

文化変容ジレンマへの心的対処戦略

誰しもが何らかの「信念体系」をもって生きている。しかし今の生活をそのまま続けることが許されないことに気づいた場合は、受容と変革のジレンマに悩む。信念体系レベルで他のサブシステムの矛盾や岐路にストレスが発生する。それを整合性させるためには適切な知と心

のはたらきの対処を必要とする (フェスティンガー「認知的不協和」*8)。自分の中で解決できない場合には、事実の命題の矛盾よりも、自分がどのように受け取るかの認知の媒介がうまく働いていないこともある (エリスの論理療法*9)。その認知が自分でも意識しないスキーマ (自動思考) にしばられている場合もある (ヤングのスキーマ療法*10)。

こうした様々なレベルで対応するためには、新しいモノの見方・考え方を習得する必要がある。あたかも微分積分を習っていない中学生に微分積分の問題を出してみると簡単には解けないうで悩むことに構造的には類似している。(岡本 (2014) *11)。

ポイント

個人の主体と環境の相互作用の社会デザインという視点から文化をとらえ、コミュニティプロファイリングによりローカルコンテキストを踏まえつつ、関係主体の文化変容ジレンマへの対処戦略の構築、創造的伝承へとつなぐための新たな枠組みが必要である。

注

- *1) Lewin, K (1936). Principles of Topological Psychology. New York: McGraw-Hill.
- *2) Taylor, E. (1920). Primitive Culture, Murray.
- *3) Kluckhohn, C. (1949) . Mirror for Man: Anthropology and Modern Life, Whittlesey House.
- *4) Finke, P.(2013). A Brief Outline of Evolutionary Cultural Ecology, in Traditions of Systems Theory: Major Figures and Contemporary Developments, ed. Arnold, DP, Routledge.
- *5) Damasio, A.(1994). Descarte's error: Emotion, reason, and the human brain, Avon Books.
- *6) Hawtin, M. (2007) Community profiling, Open University Press.
- *7) Maslow, A. (1970).Motivation and personality, Harper & Row
- *8) Festinger, L. (1957) . A Theory of Cognitive Dissonance. California: Stanford University Press.
- *9) エリス, A. (1981). 論理療法, 川島書店
- *10) Young, JE; Klosko, JS (1993). Reinventing your life, Plume.
- *11) 岡本拓也 (2014) 誰も教えてくれなかったスピリチュアルケア, 医学書院, pp157

被災地の復興活動からみる人材と戦略の相互影響による成長

許 海妍

早稲田大学社会科学総合学術院 助手

1. 序論

2021年3月20日、早稲田大学先端社会科学研究所では「暮らしと文化の創造的伝承に向けて 東日本大震災復興10年を考えるシンポジウム」というシンポジウムが開催された。本シンポジウムでは、震災が発生し現在に至るまでの登壇者による復興活動の成果を報告し、ディスカッションが実施された。本シンポジウムの目的は被災地における復興活動を振り返り、今後の課題に関して考察することである。本シンポジウムを開催することにあたって、5つのキーワードを作った。その上で、被災地の復興の在り方について検証と考察することができた。

2. 5つのキーワードについて

被災地の復興の在り方を検証する基準として5つのキーワードを作った。5つのキーワードは次のようである。

- 1) 発見的方法：地域の文化や魅力をどのように発見し共有化したか？
- 2) 創造的伝承：どのような工夫で新たな価値を創造したか？
- 3) つながり人口：地域外の人とどのようにつながってきたか？
- 4) 持続可能な仕組み：内発的発展を促す自律的な仕組みができたか？
- 5) 地域を担う人材：地域を愛し続ける若者は増えてきたか？

キーワード1)は地域内部・外部に地域の魅力をどのように発信し、共有したかを表す。2)はどのような戦略を通して地域の魅力を創造したかを表す。3)は地域外部の人とどのような方法で関係を作ってきたかを表す。4)は地域

内を中心にしたまちづくりである内発的発展を進めるための仕組みが地域内で作られてきたかを表す。最後に5)は復興活動やまちづくりを担う人材を育成してきたかを表す。まとめると、1)、2)、そして4)は被災地の復興における「戦略」である。そして、3)と5)は復興を担う「人材」である。

3. 人材と戦略の相互影響による成長

本シンポジウムの報告とディスカッションを通して、以下の点を発見することができた。被災地の復興において、人材と戦略は相互に影響する関係であり、お互いに影響し続けることを通して人材と戦略は共に成長するのである。許(2020)は、被災した住民が人材として復興活動に参加するためには、地域愛着を持つことが必要であると述べた¹。被災地で活動する人材は、被災地に居住しなくても、「つながり人口」として住民と交流し、まちづくり人材として活躍する地域外部の人材の活躍も期待することも明らかになった。つまり、被災地で活躍する人材というのは、地域に居住する住民と外部から被災地と関わる人材である。そして、これらの人材の協働が重要である。

本シンポジウムで明らかになった点は、被災地の復興における戦略は人材の活動によって可能になる点である。しかし、人材と戦略は最初から完璧な状態にある要素ではない。人材は「地域を愛する」ことから活躍する。そのため、人材は復興活動を行う初期段階から大した能力を求められていない。むしろ、戦略を立て、実行していく過程を通して、人材は自分についての探求し、能力を磨いていくのである。つまり、復興活動を行う経験から人材としてのキャパシティビルディングが可能になり、そしてその人材が立てた戦略も進化していくのである。

このことから、被災地の復興において人材と

1 許海妍(2020)「被災地復興から持続可能な地域社会づくりに向けた知識資本及び人的資源の転換プロセスに関する研究」『早稲田大学 社会科学研究所 社会学論集』36, 47.

戦略は図1のように相互に肯定的影響を与える関係と考えられる。そして、その関係を続けることで成長していくのである。

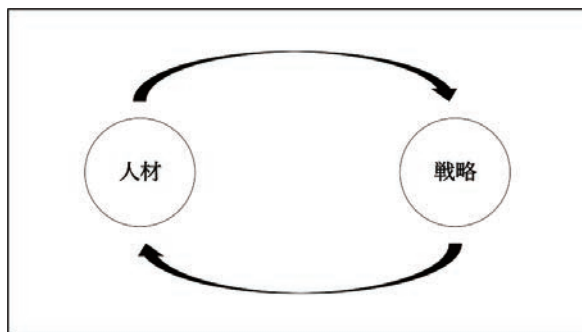


図1. 人材と戦略の関係

4. 結論

本シンポジウムを通して、被災地において重要な点となる人材と戦略の関係について明らかになった。本シンポジウムで報告した多様な年齢の人材の活動から、地域に愛着さえ持つのであれば、人材の年齢と能力は関係ないということが分かった。実際、地域の魅力を外部に発信し、地域の新たな価値を創造するための活動を実施した学生の報告を通して、次世代によるまちづくりがとても期待できた。また、活動していく中で、被災地の中で持続可能な仕組みが作られていく姿も見られた。被災地における復興が遅れているという意見は存在する。しかし、諦めずに続けて成長していく姿は、研究者が強調する「レジリエンス（回復力）」において必要な様子そのものを指しているのではないか。

参考文献

許海妍（2020）「被災地復興から持続可能な地域社会づくりに向けた知識資本及び人的資源の転換プロセスに関する研究」『早稲田大学 社会科学部研究科 社会学論集』36, 37-50.

歓待としての地域づくりへ

清水 健太

早稲田大学社会科学総合学術院 助手

本シンポジウムで司会を務めるにあたり参考になりそうだと考えていたのは、哲学者・國分功一郎(2011)による「歓待」についての議論だった。

國分は「歓待」を「寛容」との対比で次のように説明する。まず寛容とは「既にある自分を維持しながら、他人を受け入れ、その存在に我慢 (tolerer) することであり、そこでは「すでに現実化されている本質の維持が前提されている」。これに対して歓待とは「他人を受け入れることによって、主(あるじ)と客が共に変容することである」¹。ここで「いまだ現実のものとなっていない本質が現実化する。」両者の違いは受け入れるか否かにではなく変容の有無にあると、國分は言う。

念頭に置いていたのは、ゲスト登壇者・加藤拓馬さんがシンポジウム当日も話された『『地域の持続可能性』を第一目的とする教育は大人のエゴではないか?』という議論だった¹。教育の第一義的な目的は国や地域の持続ではなく、学ぶ本人が「自由²になるため」であるべきである。子どもや若者がより自由になることが、結果的に住む場所を問わず地域と良好な関係を形成し続けることにつながり、それが地域の持続にも結びつくはずだ。加藤さんが現場で長年試行錯誤した末に辿り着いたこの見方は、「暮らしと文化の創造的伝承」という本シンポジウムの主題に対して既に一つの答えになっていると筆者は考えていた。

加藤さんのような見方で「結果として持続し

ていくこと」を目指す地域の姿勢は、「寛容」ではなく「歓待」として理解できる。地域、すなわち現在地域を担っている人々は、これからの担い手として期待する子どもや若者、よそ者が自らの夢を追求すること、個人としてより自由になっていくことを支持し支援する。そうしてより自由になった若者たちが結果的に地域を担っていくとすれば、それは「すでに現実化している地域の維持」ではありえない。彼らが担っていく地域は必ず、彼らが個々人として追求する夢や自由を土台として構築される。それは彼らと異なる人々が担っていた、つまり彼らのものと異なる夢や自由を土台として構築されてきたそれまでの地域とは、当然異なるはずだ。だがそれは「これから」の担い手が「それまで」と断絶して全く異質な地域をつくっていくことには必ずしもならない。なぜなら歓待において生じる変容は相互的であるはずだからだ。若者たちが地域に歓待されることで変容し、夢や自由をよりよく追求し、結果的に何らかの形で地域を担っていくようになる。このような地域と若者たちとの関係において生成的に現実化していく地域は、それまでの地域のあり方と若者たち一人ひとりの個性の両方が表現された姿になるはずだと考えられるのである。

*

シンポジウム当日の議論でも、いま地域を担う人々の変容や、これから地域を担う(と期待される)若者たちがあくまで個々人としての夢や自由を追求することの重要性を示唆するような事例や言葉がいくつも挙がった。

気仙沼高校の藤田亜美さん・小松美穂さんは、探求学習コーディネーターとして関わっている加藤さんについて、加藤さんのいいところは「想像力を広げさせてくれるアドバイスをしてくれるところ」(小松さん)、加藤さんは『『自分が本当にしたいこと』を(一緒に)見つけてくれる人』(藤田さん)だと語っていた。二人は今、東日本大震災から10年経った今の気仙沼をSNSで気仙沼の外に伝える活動をはじめている。二人がそれぞれ自分について理解を深

1 加藤拓馬(2020)「地域づくりと教育のジレンマ—それって大人のエゴ?—」<http://maru-zemi.com/2020/08/background2020/>

2 ここで加藤さんが用いている「自由」の概念は、國分功一郎(2020)によるスピノザの自由に関する議論を参照することでよりよく理解できると考えられるが、ここでは紙幅の関係で指摘するにとどめる。

めた結果気仙沼という地域が意欲や目標の対象になっているという順序であること、すなわち若者と地域がともによりよくあれるような関係であることが、和気あいあいとした雰囲気からもよく分かった。

ふたば未来学園高校の山田あさかさん・吉田春音さんが取り組んでいる探究学習のテーマは「韓国と日本が仲良くなるには？」だった。福島・広野という地域に関連しつつも、あくまで「韓国が好き」という二人の関心に根差しており、それだけ発表の内容も調子も生き生きとしていたことが印象的だった。

三國陸真さんが関わる「なとりこどもファンド」では、助成金の審査に対して大人が票決権をもたず、どの案を採択するかがこども審査員に一任されており、審査基準も毎年子どもたち自身で設定する形が採られていた。そして当初大人が疑問をもっていた案が、採択され実行された結果ポジティブな効果があると分かったこともあったという。「なとりこどもファンド」の立役者はもちろん子どもたちだが、その活躍は時に疑問を抱きながらも子どもたちの考えや議論を最大限尊重する大人の姿勢もあってこそであろう。

戸塚絵梨子さんは、釜石にやってくる人は、戸塚さん自身も含めてみな「自分自身がどういう人間なのか」について悩み、探究しているように見えるという。単に「自分がやりたいこと」を地域という舞台で実現するというのではなく、地域の課題や地域の人々がもっている思いと自分を掛け合わせた時に何ができるかを考え、釜石に来る以前には想像もできなかったような新たなことが衝突や苦しさを伴いながらも生まれていっていると現場で感じている、とのことだった。新たにやってきた人々が地域との関係で変容しそれ以前の想定を超えた事柄へ至っている状況は、「よそ者」が地域に関係する多様なあり方を、例えば「移住」の有無にもこだわらずに受容し推進する釜石の企業の姿勢と呼応するものではないかと考えられる。

田野畑村で一般社団法人燈の代表を務める高

浜大介さんは、地域に足りないのは「リスクを取って自分で事業をやるプレーヤー」だと言う。リスクを取るとは、自分自身の安定が脅かされる可能性を受け入れることだと解釈できるだろう。それは経済的・社会的な安定が脅かされることはもちろん、その人自身が想定外の方向へ変容していく可能性を認めることをも含むのではないかと考えられる。

*

このような「歓待」を原理とする地域づくりの方法を、ここでは「歓待としての地域づくり」と呼んでみたい。歓待としての地域づくりにおいては、それまでの担い手とこれからの担い手（として期待される人々）が互いに関係・変容し合いながら、それぞれがより自由になり、両者の個性が表現される形で地域が生成的に現実化して持続していく。抽象的かつ理想的にはこのように定式化できる。これは地域で培われた暮らしや文化が「創造的」に「伝承」される方法のありうる一つだと言えるのではないだろうか。

歓待としての地域づくりはまだまだ青写真に過ぎない。だがこの構想は、國分功一郎(2020)や伊藤亜紗(2020)が展開する「倫理」に関する議論や、社会学や人類学で近年隆盛しているエスノグラフィーなど通じるものではないかと、筆者は考えている。具体的な場所や関係の中でいかによりよい生き方を考えていけるか、またそのことに寄与するような学術的知見を産出し伝えることができるのか。これらを探究していくことが、本シンポジウムから筆者に与えられた宿題である。

参考文献

- 伊藤亜紗(2020)『手の倫理』講談社
 國分功一郎(2011)「歓待の原理—クロソウスキーからフリーエへ—」<https://ameblo.jp/philosophysells/entry-10905760250.html>(2021年5月6日最終閲覧)
 國分功一郎(2020)『はじめてのスピノザー—自由へのエチカー—』講談社

暮らしと文化の創造的伝承に向けて
東日本大震災復興10年を考えるシンポジウム事後レポート

2021年9月

発行：早稲田大学先端社会科学研究所

企画：卯月盛夫・早田宰・落合基継・黒川哲志・佐藤洋一・許海妍・清水健太

編集：清水健太

© 2021 IASS, Waseda Univ.